

令和元年6月4日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17335

研究課題名(和文) 情動焦点型コーピングの機能的メカニズムにかかわる潜在的・顕在的感情の役割

研究課題名(英文) Functional mechanism of emotion-focused coping on implicit and explicit affect

研究代表者

内田 香奈子 (Uchida, Kanako)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：70580835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：多くの研究でコーピングの様々な機能について検討されてきた。しかし情動焦点型コーピングと健康や適応との関係は未だに不明瞭な部分がある。本研究の目的は情動焦点型コーピングの機能的メカニズムに潜在的・顕在的正負感情がどのような影響を及ぼすかの検討であった。

要約すると、顕在的正感情の高さは男女ともに特性的情動焦点型コーピングを導く可能性を示唆した。また潜在的感情価の高さが女性で健康を、そして潜在的・顕在的負感情の高さは女性で特性的情動焦点型コーピングの低さを導くことであった。対照的に潜在的感情価の高さは状況的情動焦点型コーピングや健康状態とは関連がみられなかった。今後も検討が望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ストレスへの対処方法には様々な方略がある。先行研究では、ストレスの原因となる問題そのものへ向かう対処方法である、問題焦点型コーピングが健康や適応を促進する結果が多く確認されている。一方でストレスによって生じる感情への対処方法である情動焦点型コーピングへの知見は混乱している状況にある。

現実場面では、問題解決に向かうことが容易な場面ばかりではないことが予想される。情動焦点型コーピングがどのような状況下で機能的に働くのかを検討することは、ストレス社会と言われる現代社会において、私たちとストレスとのつきあい方を広げる一助となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：A great amount of research has been examining various functions of stress coping. However, the relationships between emotion-focused coping and both health and adjustment are still unclear. The purpose of the study was to examine the functional mechanism regarding the effects of emotion-focused coping on implicit positive and negative affect (IPA and INA) and explicit positive and negative affect (EPA and ENA).

Taken together, results showed that higher EPA lead to higher dispositional emotion-focused coping and adjustment for men and women. Moreover, it was revealed that higher implicit affectivity (i.e., higher IPA and INA) lead to healthier status for women, and that higher INA and ENA lead to lower dispositional emotion-focused coping for women. In contrast, higher implicit affectivity was not associated with situational emotion-focused coping and health status. The present findings will need re-examinations in future research.

研究分野：心理教育科学

キーワード：ストレス・コーピング 潜在的・顕在的感情

1. 研究開始当初の背景

ストレス・コーピング研究は、Folkman & Lazarus(1980)による問題焦点型コーピング(problem-focused coping)と、情動焦点型コーピング(emotion-focused coping)の分類をベースに研究が発展した。前者のコーピングの使用は、その後の健康状態を促進させることが明らかとなっている(e.g., Amirkhan, 1990)。一方、情動焦点型コーピングは問題焦点型コーピングに比べ、健康に対し、非機能的な対処方略であることが示されてきた(e.g. Endler & Parker, 1990)。

しかし 2000 年に入り、情動焦点型コーピングの肯定的な知見も提供されている。例えば、Stanton et al.(1994)は、このコーピングが健康や適応へ非機能的と称される原因の一つに、既存の情動焦点型コーピングを測定する尺度項目がストレス反応と交絡する問題を持つことを実証的に示した。その後、彼女らはこの問題点を改善した尺度(Emotional Approach Coping Scales: EAC)を開発した。この尺度は感情処理(emotional processing)と感情表出(emotional expression)の2因子で構成されている。EAC を用い健康や適応への影響を検討した結果、例えば感情表出によるコーピングが、女性において抑うつなどの変数と負の相関、男性においても生活満足感と正の相関を導くなど、情動焦点型コーピングの機能的側面を示している(Stanton et al., 2000)。筆者も、Stanton らと同様に、交絡の問題を考慮した尺度を開発し(内田・山崎, 2006, 2007)、検討を行った。その結果、機能的側面として、感情表出によるコーピングが他者へ自分の困難な状態を伝えるシグナリング機能を有する点を明らかにした。一方で、非機能的側面として、同コーピングが抑うつを高める結果を導き(内田・山崎, 2006, 2008, 2013)、研究知見は更に混迷している。

近年、感情の機能については、意識下にある感情の機能が強調され、その一部はインプリシット感情(implicit affect: IA)として測定され始めている(Quirin et al., 2009)。そして、エクスプリシット感情(explicit affect: EA)のみでは明らかにされなかった知見や、両感情の相互作用が健康・適応に及ぼす影響が明らかにされつつある(e.g., Quirin & Lane, 2012)。筆者もこれまで情動焦点型コーピングの機能・非機能的側面に関する基礎的な研究とともに、小学校における予防教育プログラムの効果測定用として、児童用のインプリシット感情(IA)測定ツールの開発に着手してきた(内田他, 2014, 2016)。近年、インプリシットな心的特徴の研究は盛んに行われている。インプリシット感情(IA)について、Quirin et al. (2009)は、感情的経験の認知的表象の自動的賦活であると定義している。感情の前概念的表象とも呼べ、基本的には前意識において機能していると想定されるものである。

さて、情動焦点型コーピングに関する新たな検討を行う場合、この IA がひとつのキーとなるのではないだろうか。なぜならば、問題焦点型コーピングがストレッサへ直接的に働きかける類のコーピングである一方で、情動焦点型コーピングは、ストレッサによって生じた感情のコントロールを試みる類のものである。そして、そのターゲットとなる感情は、エクスプリシットな感情(EA)ではあるが、EA は IA の一つの表現型に過ぎない。インプリシット、エクスプリシット両心的特性の関係は健康・適応面で多様な変動をもたらすことが示唆されており(e.g., Jordan et al., 2003)、情動焦点型コーピングが EA を対象とするコーピングである以上、その背景にある IA の側面を検討する必要がある。つまり、情動焦点型コーピングにおける研究知見の混乱も、コーピング適用前の両感情状態をみれば、解決し整理に至る可能性があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の4点である。第一に、情動焦点型コーピングの測定ツールの開発を行う。情動焦点型コーピングに的を絞った尺度は、内田・山崎(2006, 2007)においても開発された。当初は先行研究におけるデータ蓄積量の多さから、Stanton らの EAC のうち、感情表出方略のみに的を絞り尺度開発を行った。しかし、情動焦点型コーピングの機能面を明らかにするためには、Stanton らの尺度と同じ形式の測定ツールを開発し、検討する必要がある。そこで EAC の本邦版を開発し、その信頼性と妥当性の検討を行う。

第二に、インプリシットとエクスプリシット感情が情動焦点型コーピングに与える影響の横断的ならびに縦断的検討を行う。ここでは、IA と EA, ならびに情動焦点型コーピングの関係を明らかにする。感情は IA, EA ともにポジティブ、ネガティブの2側面から検討を行う。なお、横断的、縦断的両アプローチによる検討を試みる。

第三に、仮想的ストレス状況下におけるインプリシットとエクスプリシット感情が情動焦点型コーピングに与える影響について検討する。感情は、状態と特性の両様相が存在する。そのため、ストレス状況下において大きく変動する可能性を持つ。この点を考慮して、仮想的なストレス状況下を設定し、ベースラインと比較しながら、IA と EA の変化と情動焦点型コーピングの関係が健康・適応に及ぼす影響を検討する。

第四に、得られた研究成果を元に、情動焦点型コーピングの機能的・非機能的メカニズムに関するモデルの構築を試みる。IA と EA, 情動焦点型コーピング、そして健康・適応の関係について、情動焦点型コーピングの機能面に焦点を当てた統合モデルの構築を試みる。

3. 研究の方法

(1) 研究1 情動焦点型コーピング測定ツール・EAC 特性版の開発を行う。ここでは Stanton et al.(2000)の開発した EAC の日本語版を開発するが、この尺度は、コーピングを以下の2側面から捉えることが可能な尺度である。一つ目は、比較的安定したものと捉え、普段のストレスに対するコーピングを指す特性的コーピング(dispositional coping)、二つ目は特定の時点や状況に対するコーピングである、状況的コーピング(situational coping)である。2つのアプローチ尺度は、項目は同一で、教示文の変更により作成が可能なものである。2つのアプローチ間には健康や適応において、相違が確認されており(Stanton et al., 2000)、情動焦点型コーピングの機能的側面を検討する上で、両者の作成が必須となる。まず、研究1では、手始めとして特性的コーピングの測定が可能な EAC 特性版の開発を行う。教示文は次の通りである。

“私たちは、みなさんがストレスとなる出来事に直面したとき、どのように考えたり、行動しているのかについて興味を持っています。ここで言う「ストレスとなる出来事」とは、あなたにとって難しいことや困ったことがある状況をさし、イライラしたり、対処するために多くの努力を払ったりする状況です。ストレスへ対処するための方法は数多くあります。この質問紙はあなたがストレスとなる出来事を経験したとき、普段行うこと、感じることを、そして考えることをおたずねするものです。もちろん、経験が違えば対処する方法も異なるかもしれませんが、ストレスを受けているとき、あなたが普段行うことについて考えてください。”回答は原版と同様の4件法を用い、いつも行う(4点)、ときどき行う(3点)、あまり行わない(2点)、まったく行わない(1点)で求める。

(2) 研究2 研究1で開発された EAC 特性版を元に EAC 状況版の開発を行う。具体的には、項目は EAC 特性版と同一のものを使用し、教示文のみ今の状況の中で回答者にとって最もストレスとなる出来事へのコーピングを問う形式へ変更し、標準化の作業を行う。回答も原版と同様に、よく行っている(4点)、ときどき行っている(3点)、あまり行っていない(2点)、まったく行っていない(1点)で求める。

(3) 研究3 混迷する情動焦点型コーピングの機能的側面を明らかにするため、IA と EA が情動焦点型コーピングに与える影響を横断的に検討する。IA の測定には Quirin et al.(2009)によって開発された Implicit Positive and Negative Affect Test(IPANAT)の日本語版(下田他, 2014)を、EA の測定には Positive and Negative Affect Schedule (PANAS)の日本語版(佐藤・安田, 2001)を使用する。情動焦点型コーピングには先に開発された EAC 特性版を使用する。また、健康変数には大学生での精神的健康問題を鑑み、抑うつを測定し、尺度には CES-D (Center for Epidemiologic Studies Depression scale)の日本語版(島, 1998)を使用する。

(4) 研究4 研究3での情動焦点型コーピングの機能的側面を長期的スパンで検討すること、ならびにコーピングの特性的・状況的両アプローチ方法による違いを検証するため、短期縦断的検討方法に移る。測定尺度は、情動焦点型コーピングには研究2で開発された EAC 特性版ならびに状況版を、IA の測定には IPANAT の日本語版を、EA の測定には PANAS の日本語版を、健康変数には抑うつ測定のため CES-D の日本語版(島, 1998)を使用する。縦断的検討は3ヶ月以上の期間を空けることが一般的であるが、今回は検討の手始めとして短期縦断的検討とし、その期間は1ヶ月間とする。

(5) 研究5 仮想的ストレス状況を設定し、その状況下において IA と EA の変動が情動焦点型コーピングに与える影響を検討する。仮想的ストレス状況としては、応募者の大学院での授業内において、予告のない小テストを実施し、授業のオリエンテーションならびに小テスト実施後に、IPANAT、PANAS と EAC 状況版の測定を行う。なお、実験にともなうインフォームドコンセントへの配慮としては、授業のシラバスには授業内に研究を目的とした評価等が行われる旨を記載し、オリエンテーション時にも説明を行う、研究後には授業内で研究目的などの説明を行う。

(6) 研究6 これまでの研究結果の総括として、情動焦点型コーピングが機能的・非機能的に働くメカニズムに関するモデルの構築を試みる。IA と EA の状態が、いかにエクスプリシットな感情へのコーピングに影響するのか、この点を中心に整理し、モデルを構築したい。

4. 研究成果

(1) 情動焦点型コーピング測定ツール・日本語版 EAC (特性版と状況版)の開発

情動焦点型コーピングの機能的側面を検証するため、日本語版 EAC を開発した。まず、手始めとして特性版の開発を行った。検討の結果、原版と同様に感情処理と感情表出の2因子が抽出され、因子的妥当性、内的整合性、安定性と弁別的妥当性ならびに感情表出の併存的妥当性が示された。精度高く作成された本尺度は情動焦点型コーピングが健康や適応へ与える影響について、歪みの少ない知見の提供に寄与するだろう。しかし、より精度の高い査定道具を目指し、標準化の精度を高める必要がある。たとえば、感情処理は妥当性について因子的ならびに弁別的妥当性の検討のみにとどまった点である。併存的妥当性実施を見送ったのは、妥当な測定尺度がなかったためであった。今後は、たとえば他者評定法や実験等の手法を用いた、更なる検討が必要である。

次に、状況版の開発を行った。検討の結果、原版ならびに特性版と同様に感情処理と感情表

出の2因子が抽出され、因子的妥当性、内的整合性が確認され、尺度が完成した。ただし、構成概念妥当性については課題が残される結果となり、今後の検討が必要となった。

(2) インプリシットとエクスプリシット感情が情動焦点型コーピングに与える影響の横断的ならびに短期縦断的検討

インプリシット正負感情(implicit positive affect: IPA, implicit negative affect: INA)やエクスプリシット正負感情(explicit positive affect: EPA, explicit negative affect: ENA)が情動焦点型コーピング使用や適応に与える影響の予測因となるのかを検証するため、横断的な検証を行った。検証の結果、高いEPAは男女ともに特性的な情動焦点型コーピングや適応を、高いENAやINAは女性において抑うつを導くことが示唆された。さらに、感情価の高さ、つまりIPAとINAの高さは、女性において健康を導くことが示唆された。この結果は、Uchida et al.(2016)における感情価の高さが児童の学校適応状態を高めた知見を支持する結果となった。

次に、このモデルをベースに、短期縦断的検討を行った。検討の結果、ENAが高いとき、状況的な情動焦点型コーピング(感情処理)は抑うつを高めた。また、横断的なモデルとは異なり、感情価の高さと後の健康状態との関連は確認されなかった。この原因として、横断的モデルでは普段使用しているコーピングを問うものであったのに対し、短期縦断的モデルでは、対象とするストレスが最近、つまりある一時点に対するコーピング方略の使用を問うものであったことによる結果の違いがあった可能性もある。ストレスの内容や持続性は各個人によって異なるため、たとえ縦断的モデルの期間が一ヶ月間という短期であったとしても、その検出は微細なものである可能性が考えられた。よって、次の研究ではストレス状況を一定とした上で検証を行った。

(3) 仮想的ストレス状況下におけるインプリシットとエクスプリシット感情の変動が情動焦点型コーピングに与える影響

最後に、小テストという仮想ストレス状況下において、IAとEAの変動が情動焦点型コーピングにどのような影響を与えるのかについて検証した。T1の各感情がT2のコーピングへどのような影響を与えるのかを確認するため、T1のIPA・INAあるいはEPA・ENAを独立変数、T2の各コーピング変数を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、T1におけるINAの高さがT2の状況的な情動焦点型コーピング(感情表出)を低める結果を確認した。なお、感情の変動に着目し、T2からT1の各感情の差が、T2でのコーピングに与える影響も同様に確認したが、有意な回帰係数は確認されなかった。ただし、この研究では各変数においてT1とT2との間に有意な差がほとんど確認されなかったことから、その介入操作が上手くできていない可能性があった。また、今回は介入群のみの検証であったが、本来であれば統制群も設定した上での検証を行う必要がある。

(4) 情動焦点型コーピングが機能的メカニズムに関するモデル構築の試み

以上の結果を踏まえ、情動焦点型コーピングが機能的に働くメカニズムを探った。まず、普段の日常一般的場面においては、潜在的感情価の高さ、つまりIPAとINA両感情の高さが女性において健康を促進していた。EPAの高さが情動焦点型コーピングや適応の高さを予測し、かつEPAとIPA、ENAとINAに低い相関があったことを加味すると、潜在的感情価の高さと特性的な情動焦点型コーピングは特に女性において何らかの関係性を持つ可能性は否定できない。ただし、状況的な場面においては、個人によってその法則が異なる可能性を持ち、一律のモデルを呈示することは困難であることが予想される。ただし、今回の一連の研究において、EACの状況版は特性版に比べ、標準化の精度が低いことは否めず、今後はツールの精度を高めた上での、さらなる検証が必要であろう。

<引用文献>

- Amirkhan, J. H. (1990). A factor analytically derived measure of coping: The coping strategy indicator. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1066-1074.
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 844-854.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, 21, 219-239.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and Defensive High Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(5), 969-978.
- Quirin, M., Kazén, M., & Kuhl, J. (2009). When nonsense sounds happy or helpless: The Implicit Positive and Negative Affect Test (IPANAT). *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 500-516.
- Quirin, M., & Lane, R. D. (2012). The construction of emotional experience requires the integration of implicit and explicit emotional processes. *Behavioral and Brain Sciences*, 35, 159-160.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究 9, 138-139.
- 島 悟 (1998). NIMH/CES-D Scale -うつ病/自己評価尺度- 千葉テストセンター
- 下田俊介・大久保暢俊・小林麻衣・佐藤重隆・北村英哉 (2014). 日本語版 IPANAT 作成の試

み 心理学研究 85, 294-303.

Stanton, A. L., Danoff-Burg, S., Cameron, C. L., & Ellis, A. P. (1994). Coping through emotional approach: Problems of conceptualization and confounding. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 350-362.

Stanton, A. L., Kirk, S. B., Cameron, C. L., & Danoff-Burg, S. (2000). Coping through emotional approach: Scale construction and validation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 1150-1169.

内田香奈子・山崎勝之 (2006). 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響 学校保健研究, 48, 199-208.

内田香奈子・山崎勝之 (2007). 大学生用感情コーピング尺度の作成ならびに信頼性, 妥当性の検討 パーソナリティ研究 16, 100-109.

内田香奈子・山崎勝之 (2008). 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響の予測的研究 パーソナリティ研究, 16, 378-387.

内田香奈子・山崎勝之 (2013). 女性における感情表出コーピングが抑うつに及ぼす影響の予測的研究 - 感情表出のシグナリング機能に着目して - 健康心理学研究 26, 18-27.

内田香奈子・福田衣利子・山崎勝之 (2014). 児童用インプリシット感情 (affect) 測定方法の開発 - 質問紙の原型の開発と信頼性・妥当性の最初の検討 - 鳴門教育大学研究紀要, 29, 160-168.

Uchida, K., Yokoshima, T., & Yamasaki, K. (2016). Effects of implicit affect on emotional coping and school adjustment: A short-term longitudinal study with a school-based universal prevention program for enhancing emotional abilities. European Psychiatric Association, Madrid, ESP, March 15.

内田香奈子・横嶋敬行・山崎勝之 (2016). 児童用インプリシット感情尺度 (IPANAT-C) の改善 - 信頼性と妥当性の再検討 - 鳴門教育大学研究紀要, 31, 19-28.

5. 主な発表論文等

(研究代表者は下線)

[雑誌論文](計1件)

1. 内田香奈子 (2018). 特性的な情動焦点型コーピングが日常の気分に与える影響 パーソナリティ研究, 27, 1-11.

[学会発表](計3件)

1. Uchida, K., Uchiyama, Y., & Murakami, Y. (2018). Effects of implicit and explicit affect and emotion-focused coping on depression: Utilizing a short-term longitudinal design. International Academic Conference on Social Sciences, Sydney, December 19.

2. 内田香奈子 (2018). 日本語版 Emotional Approach Coping Scales (状況版) の作成 日本心理学会第82回大会 仙台国際センター 9月25日

3. Uchida, K., Yokoshima, T., Kaya, I., & Yamasaki, K. (2017). Effects of implicit and explicit affect on emotion-focused coping. International Academic Conference on Social Sciences, Singapore, December 20.